



別海町立中春別中学校



学校だより

令和4年5月31日 発行 校長 岩崎 撰也

SDGsの必要性について

校長 岩崎 撰也

SDGsは国際社会が取り組むべき、「持続可能な開発目標」のことで、日本でも脱炭素、ゴミのリサイクル、ジェンダーの公平化などさまざまな取り組みが進んでいます。学校においても毎月の「新聞の日」の活動でこのSDGsの17の目標に沿って記事を選ぶなど、SDGsの取り組みを意識化しています。今月の全校集会ではこのことに関わり南太平洋にあるモアイの島、イースター島の歴史について生徒に話しました。

南アメリカにチリという細長い国がありますが、チリから南太平洋に向かって西側、3、700 km進んだところにイースター島という島があります。モアイ像がある島といえば、ああとと思う人もいますね。この島の大きさは北海道の礼文島くらい、一周すると170 km位の大きさです。亜熱帯に位置し、豊かなジャングル、自然がいっぱいの島だったそうです。

7、8世紀ころ、人が住み始めました。ハワイとかにいるポリネシア系の人々です。一人の酋長（しゅうちょう）のもとに、作物を育てたり、カヌーで海に出て魚を捕ったりして生活していたのですが、問題はだんだん人が多くなってきたことです。代が変わるごとに有力者が分家して部族の数が増えました。そして、それぞれの部族の守り神として競うようにモアイ像を建てました。モアイ像は重さが10トン以上、最大のもは90トンもあるそうです。部族の中で食料を生産しない人はモアイづくりをする。巨大なモアイを運ぶために大量の木材が必要だったようです。それから、たくさん増えた人々が住むための家を作るために、たくさんの木を使いました。そして、気がついてみると豊かだったジャングルに木が一本もなくなってしまいました。（ネズミが増えて樹木の種を全部食べたからという説もあり、とにかく木が一本もなくなってしまいました。）

すると、何が起これると思いますか？大雨がふると、地表の栄養のある土が流れ、荒れた作物の育たない土地になり、カヌーを作って魚を採りに行くこともできなくなってしまいました。わずかに残った作物の作れる土地を争って部族間で戦争になって、最大2万人位いた人口が6,000人位に減ったそうです。

その後、ヨーロッパの人がこの島に船に乗ってやって来たとき、洞窟などに住む人々はみな痩せこけて、原始人のような生活をしていて、とても巨大なモアイをつくる文明を持った人々には見えませんでした。この島が発見されてから住民は奴隷として連れて行かれる、ヨーロッパから持ち込まれた伝染病でたくさんの人が亡くなるなど、本当にいいことがなくて、最終的にはほとんど人がいなくなり、モアイ像だけが残った、という悲しい歴史がこの島にはあるそうです。

温暖化や異常気象、森林の砂漠化など今、地球に起こってる深刻な課題を振り返って考えると、この島の歴史は、将来の地球全体に起こることの予告という気がしませんか？

人類の営みの中で、自然の法則に反した傲慢な資源の消費を続けることは滅亡へと繋がっています。「このままでは地球が危ない」という危機意識とともにSDGsの取り組みは今地球に住む私たち一人一人が本当に真剣に考えなければならないことだと思います。